

はその裝飾たるべき姿や戀の歪める故に歪みくねり不束なる兵卒が薬筒内の火薬の如く己が無智故爆發し己が防衛の道具をもて自ら己を損傷はむず、ハテ起てよロメオ、いとしいデユリエットは生存へ居るぞよ、彼女故卿は遂昨日迄も死ぬ程惱み悶きしならずや、思を遂し今の卿は結句幸福又タイバルトに殺されむとしたるを、卿却て彼を殺したれば是も亦幸福ならずや、卿に死を迫りし國法も、卿に與して死を追放となしたれば是も亦幸福なり、天の下せる幸は卿が背に堆かく、浮世の幸福は盛粧して、卿に媚を送るなるを、意地のくねつた執拗女郎でもあるやうに、我が運命を罵り、我が戀をさへ疎んずるよな氣を付けよ、それで善い死様はよもせまい、ハテ、約束の如く、先づ戀人を訪れよ、偕て彼女が居室を攀ぢ、よく戀ろに慰めよ、乍去餘り長

居をして、夜番の者に見咎められな、マンチニア(名地)へ落延ることも叶ふまいぞ、彼地へ落延し上は、其處に滞在をなし居る中、機を見て我等結婚の次第を披露し、卿が知友の間にも、宜しき様に取なし、殿下の允可を乞受け、卿を再び呼迎へむ、其時歸國の喜悅は、出行く今の嘆きに幾千萬倍——コレ乳母殿一步先へ歸るがよい、嬢に宜しく申して呉りやれ、そして早速家内の者を、寢靜まらするやうに致させい、常とは違ひ、一家愁嘆にかさくれたれば、結句それも容易からう、ロメオが直ぐに參るぞよ。

乳 南無阿彌陀、妾は一晚こゝに居て、結構な御訓戒を承りたい位でムります、學問と申すは、何といふ結構なものでムりませう——ロメオ様、それでは奥様に、貴君の御出を申上ますぞへ

ロメ さうして呉りやれ、そしてお談義の準備を致し置くやうに申すが
よ

乳 あゝそれ、これは貴君にお進^めげ申せと、奥様が御申付の指環でムリ
ます、そして何卒御急ぎなされませ、最早夜も更けましてムリます

と乳退場

ロメ これて(指環を受取り)安心致したと申すもの(サエリエツトが親近を殺
したらむと察せしに指環を送り越せし
を見れば杞憂なりしと安心せしなり)

上人 さらば、お出やれ、おさらば、返すくも卿が取るべき道はかうてム
るぞ、夜番の警衛の、始まらぬ前にお立退やるやうに、若し遅れたなら、
夜明よあけに姿を窺して、忍出づるが宜しからう、さてマンチユアに滞在致す
中には、適宜の者を見付け、其者をして、茲にて起る大小の事件を、一々

卿に報道致させう、いで握手を、夜も大分更けた様子、さらば、安らかに
ロメ 望外の喜に引立てらるればこそ、さもなくば、かく無雑作に御別れ
致すは、嗚名残惜しい事でムりましたらう、左らば御機嫌よう

と一同退場

第四場 同 カブレット家の一室

カブレット、同夫人、及マリス登場

カブ 箇様な椿事が起りし故、娘を説諭すべき暇もムらなんだ、思うても
御覽なされ、娘はタイバルトが酷ひどう好すてムつた、拙者とても同じ事、そ
れに此度の不幸、ほんに人間は死ぬる爲めに生れたもの——今夜は
最早夜も深けたれば、娘は下りては(階上の己が)参りますまい、イヤ貴

殿の御光來がなかつたなら、拙者は一時も前に、たゞ寢床に就たてム
らうに、御蔭で憂を晴しました

ベリ げにかやうな愁嘆の際に、色戀の暇はムらぬ、夫人、さらば御休みな
されませ、令嬢に宜しく御傳言を

夫人 畏まりました、そして明朝は早々と、彼が心を聞いて見ますてムリ
ませう、今夜はたゞ悲嘆にくれたれこめてばかり居ります

カフ パリス殿、拙者は思ひ切て娘を差上ることゝ極めませう、彼女は萬事、
拙者の指揮通りに致すこととムリませう、イヤ拙者は少しもそれを
疑ひませぬ——コレ奥、其方は寢る前に、娘の許へ參て、パリス殿の御
情の程を告げ、そして、コレ、よう開け、次の水曜日——いや待て、今日
は何曜日でムつたな

ベリ 月曜でムります

カフ 月曜、ハ、ナ、それでは水曜はちと早過ぎる、水曜日に致さう、水曜日
にな此伯爵と婚儀を挙げさせる故、左様心得よと申せ——それで宜
しうムるか、かく取急ぐが御氣に召しましたか、して餘り大騒ぎは致
さぬことゝ致さう、二の友人を招待致す位に留めませう、近親のタイ
バルトが殺されて日數も経ぬに、大酒宴を致しては、餘り心無しと思
はれませう、夫故全く五六の客に留めて、其れて事を済ますと致さう
——去りながら水曜といふに御異存は

ベリ 某は其水曜が明日であつたならと思ふ位

カフ 然らば先づ御歸館なされませ、水曜と極めませう——コレ、奥、其方
は寢る前に、デュリエットに會ひ、此祝言の日取を告げて置けよ——

おさらば、パリス殿——拙者が室へ燈火を點けい、コレハ、今夜は大分遅いやうぢや、今に間もなくお早うといふやうになるであらう——さらば

と一同退場

第五場 同 カブレット家の菓樹園

ロメオ、ゲユリエット階上の窓に現れ出る

ゲユリ もう御出遊ばしますか、まだ夜明には間がムリますに、郎君の御耳に響いたは、雲雀ではなうて、鶯でムリます、此頃夜な、彼方の柘榴の樹へ来て唄ひます、あれは鶯に相違ムリませぬわいな

ロメ オヤ、あれは鶯ではない、曉の使者の雲雀、アレ見られよ、彼の東の方

なる雲の切目を悪い光が縁取るぞや、夜の紙蠟は燃え落て、嬉々たる晝は山嶺の霧の中に、爪立て、覗いて居る、これで別れて生存へうか、長居をして殺されうか

ゲユリ 彼の光は日の光ではムリませぬ、妾がちやんと承知致して居ります、あれは太陽から出ると申す流星で、今夜郎君をマンチユアへ御案内の爲め、現れたのでムリませう、それ故、もちつと御在なされませ、御立ち遊ばすには及びませぬ

ロメ え、捕はれても殺されても恨はない、そもじさへさういふ意であるならば、あの薄明りも東雲ではない、シンシア(女神)の額から映し返す薄明りぢや、あの頭の上で、青天井を震動して響く鳴聲も、雲雀ではないとして置かう、某は去にたいといふ意より、茲に居たい、山

山ぢや、來れ死の神早う來い、ヂュリエットが望ぢやぞや、どうぢやい
としの者、語り明さうてはないか、まだ夜は明けぬに

ヂュリ いや、明けました、早う急いで御出なされ、あの耳障りない
かつい鋭い聲を振立て、調子外れに鳴廻るは雲雀ぢやわいの、雲雀
といふ鳥は、美しい聲の鳴分けをすると聞きましたが、二人の中を鳴
て分るとはあんまりな、又此鳥とあの厭らしい蟾蜍とは、元とく、眼
の交換をしたとやら、序に聲迄交換へたら宜かつたらうに、其聲こそ
二人が組む腕を引離し、まだきに君をやる癖者、お、御出遊ばしませ
だん、く、明くなりませわいな

ロメ 段々明るくなりはすれど、暗くなりゆく心の闇

乳母登場



英現の存在芝居の作家シグイデ・ロメ

乳 お嬢様

アユリ 乳母がや

乳 御母様が今御出遊ばします、夜も明けましたに、御用心遊ばして、よ
う御氣を御付けなされませ

と乳母退場

アユリ そんなら、此窓から日光を入れて、郎君を御出し申しませう

ロメ おさらば、最一度接吻を、そしてこれで降ると致さう

とロメ窓より階下に降り立つ

アユリ これで御別れ申すのかいな、懐かしの殿、いとしの良人、彼地へ御
出なされたら、毎日毎刻御音信をお聞かせ下さりませ、一分時も幾十
日の思ひが致します、おゝその割に齡が老つたら、又御眼に懸る時は、

嗚かし老い朽つることてムりませうなア

ロメ おさらば折さへあつたら必ずそもじへ音信を怠ることはせま

ナユリ して郎君は再會ふ折はあらうとの思召か

ロメ そんな懸念は露程も、そして此様な愛悲みも、後々の楽しい談話の種と成らうといふもの

ナユリ 嗚悲しや、どうやら胸騒ぎが——今階下に御在遊ばす所を上から見れば墳墓の底なる人を見おろすやうに思はれて——此の眼の疲れか貴郎のお色が青いのか

ロメ ほんに此眼にもそもじの姿が其様に見ゆるぞや、さては悲嘆に、血の氣も失せしと見える、おさらば——

と退場

ナユリ おゝ運の女神は、移り氣の神様ぢやと聞いて居る、若し其様に移り氣なら信義の堅いが評判のロメオ様に御用はない筈、おゝ移り氣がよい——さらば郎君をば、何時迄も留めては置さもせまい、間もなく送り還して下さらう

夫人 (奥に) コレ——娘、もう起床てか

ナユリ 御呼びなされるは何方、母様でムりますか、まだお寝みなされぬのか、最早お起床なされたのか、どんな只ならぬ御用が有て、今頃御出なされました

カフレット夫人登場

夫人 コレ、どうしたことぢや、ナユリエット
ナユリ 妾はどうやら氣分が悪うムります

夫人 死んだ從兄を、いつまで悼み嘆くことぞ、其方の涙で、墓から洗ひ出さうといふことか、よしや洗出したとて、活かすことは出来まいが、泣くことは止しやいのう、程々の嘆きは、情愛の深いといふしるしぢやが、過ては無分別の看板ぞや

アユリ 此様な悲しい大事、泣くだけ泣かして下さりませ

夫人 其大事を泣けばとて、泣かるゝ主が戻らうか

アユリ 大事と知りながら、大事の主を、悼まずには居られぬ此身

夫人 おゝそなたの泣くは、殺されし人を泣くのでなうて、殺した悪人の、おめくゝ生存へ居るを泣くのぢやな

アユリ 悪人とはえ

夫人 あのロメオといふ大悪人

アユリ (自) 悪人などゝは以の外——神様も彼の人の所爲を御宥恕下さりませ、此身は心から、とくに恕して居りますに、とはいへ彼の様に妾の心を、悲ませる人が又とあらうか

夫人 それこそ其下手人が、此世に生存へ居る爲めぢや

アユリ 仰せの通り、此兩腕の届かぬ、遠い處に生存へ居る故、おゝ從兄の君の復讐は、何卒此身が爲し遂げたい

夫人 心配しやるなその復讐は、屹度する、最早泣くには及ばぬわいな、マシ、少々異つた飲料を送り届け、それを飲ませて、間もなくタイバルトに追付かせう、さらば、そなたも満足ぢやらうが

アユリ ほんに妾は、彼のロメオを見る迄は——死顔を見る迄は——満足

は出来ませぬ、お、妾の心は從兄故にかうも激したか、母様毒を送る人足を御見付なされたなら、一啜りて彼のロメオが、安けき眠に就くやうに、妾が毒を練りませう、お、早く傍へ往て、タイバルト殿を殺した其身体をさいなんて、タイバルト殿への心中を見せることもならぬとは、名を聞くさへ腹が立つ

夫人 何とでも善いことを思ひ付いたら、相當の人を見付て取らさうわいな、それはさうと、娘嬉しい話が出来たぞへ

アユリ こんな時に、嬉しい話とは忝ない、それは何でムります、母様

夫人 そなたは優しい父御を持たれたな、其方の苦痛をなだめむとて、定めてそなたには思ひもつかぬ、此母にも案外な、嬉しい日を俄かに極め下されたぞや

アユリ さて、それはどういふ目でムります、母様

夫人 ハテそれは、直ぐ此次の木曜に、彼の雅男の、若い美しいパリス伯が、聖彼得の御寺で、其方を花嫁御察にせうとの嬉しい話

アユリ 聖彼得の御寺も又、其聖彼得も見をなはせ、妾は彼君が花嫁御察にはなりませぬ、何故そのやうにお急ぎなされます、夫にならうと思ふ御方が、云寄ることもない中に、早くも婚儀を擧るとは、母様何卒父上様に、此妾はまだ何處へも嫁りませぬと、仰有て下さりませ、若し又嫁る時は、パリス様などへ参るより、母様も御存じの、妾が悪く、憎いロメオ殿へ参るがまし、ほんに思懸ないことを承りましたわいな、夫人 丁度父上が御出なされた、その通りに自分で御話し申すがよい、其方の口から、そのやうなことを御聞なされ、どう遊ばすか見るがよい

カブレット及乳母登場

カブ 日没すれば大氣は露を撒布せど、我が兄の子が歿してより、降るは涙の雨霰、コレどうぢや娘、噴水の石像のやうに、まだ涙に暮れ居るか、不斷の雨を灑ぎ居るか、その小さい五躰で、其方は船の摸倣、海の摸倣、風の摸倣を致し居るな、ハテ其方の眼には、涙の汐の満干がある故、海と云うても大事な、其潮の波の上に浮ぶが其方の身で、即ち船ぢや、さて其上を吹く風が其方の吐息、俄か日和にならずもあらば、荒れ狂ふ浪風に搖られ、其方の五躰はたまるまい——どうぢや、奥、父が決心の程を話したか

夫人 アイ話しましてムリですが、父上様に宜しくとばかり、一切承知致しませぬ、え、寧ろ墓場へても縁づいて行くが宜ムります

カブ コレサ静かに、よう解るやうに話すがよい、何と厭ぢやと申すか、難有いとは申さぬか、面目とは思はぬか、分に過ぎた立派な男を、婿に取て遣つたを忝ないとは思はずか

ザユリ その御親切を面目とは、どうも妾には思はれませぬが、御志は忝なう存じて居ります、自分の厭な事を面目とは、どう思はれませう、乍去厭な事とて、此身可愛の御心からなら、忝ないは山々てムります

カブ ヤイ、ツベコベと何小理屈、何ぢや面目で忝ない、そして難有くはない、不面目ぢや、コレ娘、可愛の者、難有がりはよして呉れ、面目がり措て貰はう、何はともあれ、次の木曜の仕度、よう手足を研いて置け、聖彼得の御寺へ、パリス殿と同道するのぢや、厭といやア網乗物へ乗せても連れて行くぞや、ヤイ、死人の様な青白けた顔を致して、その

様は何ぢや(とゲユリユツトを打たんとする)

夫人 コレ滅相な御心が狂うたか

ゲユリ 父上様此様に膝をついて御願致します何卒一言妾の申すことを御聞なされて下さりませ

カフ 死んで仕舞へ阿呆娘不孝者拙者の命令ぢや木曜日に寺へ行くか、さもなくば一生父の顔を見るな、ヤイ黙れ返答するな、口答を致すな、此手がじづ痒いわヤイ(たくぐり)——コレ奥たつた一人の娘を神の御授け忝ないと思つたは大間違ひ、たつた一人でも持て餘し者、子資てはなうて禍を飼て置くやうなもの、此いたづら者めが

乳母 南無阿彌陀——御前様そのやうに御叱りなさるとは、そりや餘りてムりますぞへ

カフ 賢い其方迄が何故餘りぢや、ハテ黙て居れさ、饒口りたければ、しゃべり仲間としやべるがよい、彼方へ参れ

乳 妾は、決して御前様に不忠の詞を——

カフ おさらばぢや、又來いヤイ

乳 そんなら饒舌りましては悪うムりますか

カフ 黙れつべこべと五月蠅奴、しゃべり仲間と茶噺にでもしゃべるがよい、こゝにはそんなものに用がない

夫人 あなたは、餘り御逆上なさります

カフ 氣が違ふわ、あゝ今迄は夜も晝も朝も晩も、仕事の間も休む間も、孤獨の時も、來客の時も、娘を嫁けるといふ事を、寸暇も忘れた事はなく、漸う名家の若殿で、領地を多く所有た、學びの道にもたけ、多才多能で、

其又才能がかうもして欲しいと思ふ様な程よく均勢の取れた男を、花聲にと當てがへば泣面下げた木偶身に向て來た幸運を、縁組は厭ぢやの、愛がないの、若過るの、御容赦のと吐し居る、乍去縁組が厭ぢやとあらば、大きに容赦して遣さう、行きたい處へ行くがよい、此家へは置くこと叶はぬ、コレどうぢや、考へて見い、冗談ではないぞ、木曜日は間がない、よう胸の上に手を置て思案して見い、其方が云ふことを聴けば、パリス殿へ遣さう、云ふことを聴かぬなら、首を絞るとも、街頭へ出て乞食をして、餓死死ぬとも勝手にせい、最早子でもない父とも云はさぬ、拙者が所有物は、鰥一文でも遣ることではない、恐嚇ではないぞ、よう考へて思案を極めい、此詞に容赦はない

とカフ退場

アユリ 此悲みの底を見抜て、不憫と思召す神様はないことか、おゝ母上様、妾をお棄て下さりますな、此祝言を一月程、イヤせめて一週間御延ばし下さりませ、それがならずば、あのタイバルト様の居らせらるゝ、薄暗い墓の中に新室をしつらひて戴くばかり(死ぬばかりの意か)

夫人 此母は、最早一言も口はさかぬ程に、話しかけてたもるなや、其方の勝手にするがよい、母は最早手を引くぞや

と夫人退場

アユリ おゝ神様——おゝ乳母、どうしたらよい事ぞへ喃、ロメオ様は此世、立てた誓(決意相愛す)は天にあるに、ロメオ様が此世を棄て、昇天遊ばし、天から此世へ戻して、とも下さらば知らぬこと、さもなくば其誓を、引戻すことの成るべきか——どうぞ善い知慧を貸して、此苦みをな

だめてたもれ——あゝ、此身の様なかわい者を、こんな破目に陥すとは、天も餘り惻愍な——お、何ぞ嬉しい話はないか、何ぞ慰安になるやうな、コレ乳母

乳 それならばムリです、ロメオ様は御追放の御身の上、貴嬢を遣せと、歸て御出遊ばすことはいかなく、若し御出遊ばしてもそれは内密公然ではムリませぬ、なりやかういふ破目になつた今、寧ろ伯爵様と御祝言遊ばすが、一番善い御考、お、伯爵様はお立派な殿振り、ロメオ様などは、錦の前の雑巾も同然、あの青い敏捷い、美しい御眼付と申したら、驚の眼でも追付かぬ、ハテ屹度貴嬢は、此二度目の殿御を御有ちなされて、嬉しく御慕しなさせう、初度の殿御より、ずつと優れて入らせられますものを、よしやさうでないとしても、初度のは、最早お死

り遊ばしたものの、生存へて居らせられても、御役に立たねば死んだも

同然

ゲユリ 其方は心から、そのようなことを云やるのか

乳 心から又精神の底からでムリです、若し違つたら、心も精神も奈落

の底へ墮としませう

ゲユリアーメン

乳 何と仰有ります

ゲユリ いやさ、いかにもよう懃めて呉りやつた喃、彼方へ往て母様に、妾は父様の御機嫌に背いた故、懃悔を致して、罪障消滅の御祈禱を頼む爲め、ラウレンス上人の庵室へ往くと申上てたもれ

乳 畏りました、ようこそ其の御心におなり遊ばしました

と乳母退場

ナユリ え、彼の爵當りが、お、夜叉のやうな婆ではある、此妾に立てた誓
 を棄させうとは、從來幾千度比べるものもない様に、褒め稱へた其舌
 て、同じロメオ様に悪口云ふと、何らが罪が重からう、——ヤイ乳母、こ
 れ迄は相談相手に致せしが、これからは、其方と妾の胸は別々ぞや—
 —さらば上人の庵室を音づれて、よい分別を伺はう、若し何事も叶は
 ぬなら、死ぬる力は此身にも

と退場幕

第四幕

第一場 エロナ、ラウレンス上人の庵室

ラウレンス上人及びパリス登場

上人 木曜日に、ハテ間のない事ぢや

パリス 男カブレット殿の所望で、某とても、男殿の急がるゝを、留め立
 致す程、落ついても居られませぬ

上人 令嬢の心は、御存じないと仰せられたな、少々不穩當では、ムるまい
 か、拙者は左様の事は嫌ひで、ムる

パリス 令嬢には、ダイバルトの横死を、痛く嘆かせらるゝ故、某も遠慮を致
 して、心中を語り合ふことは致しませなんだ、涙の家では、ウィーナス

(戀の女神)も笑顔を見せませぬ故、然るに娘が父親は、娘がかく悲愁にのみ耽るをいたく氣遣ひ、熱慮の上此結婚を急がせらるゝも、孤獨で置けばくよくと泣てばッかり涙の出水に溺れむを、語らふ友もあらば、救ひ得むとの事てゐる、これでかく取急ぐ理由も、畧ぼ御合點が参りましたらう

上人 (旁自)イヤ拙者は、遷延らせねばならぬ理由があるを、承知致して居る其つらさ——御覽あれ此庵室へ介娘が御光來なされた

アユリ エット登場

パリ おゝこれは好い處で、我が妻、我が戀人

アユリ ほんに此身が若し人妻に成れることなら、其御詞のやうにもなりませうが

パリ コレ、次の木曜には、其成れるならが確と成りますぞへ

アユリ 成るものは成りませうわいな

上人 ハハ、それは動かぬ金言

パリ 上人に懺悔の爲め、こゝへ御出なされましたか

アユリ その御尋ねに御答へ申せば、貴君に懺悔を致すことゝなりませう

パリ 何はまかれ某を愛する旨を、上人に御懺悔なさりませい

アユリ 上人を愛する旨を、貴君に懺悔致しませう

パリ 同様に、某をも愛する旨を、屹度御懺悔あるてゐらうな

アユリ その事ならば、貴君の御面前でよりも、御不在に申した方が、却て宜しくはムりませぬか

パリ 面前といへば、貴嬢の御面は、涙でいから汚れてゐるが

アユリ 涙の出ぬ中から、どうせ穢ない面ぢやもの、涙の汚れに、どれ程の事がムリませう

バリ そのやうな御詞は、涙よりも一層御面を汚すといふもの

アユリ これは眞實を申したので、悪口ではムリませぬ、そして自分の面前で、自分を評したのでムリです

バリ イヤ貴嬢のお面は、取りも直さず某の面、然るにそれを、貴嬢には讒謗なされた

アユリ 仰の通り、讒謗かも知れませぬ、妾一人のものではムリませぬ、モシ、上人様、只今は御暇で入らせられませうか、それとも夕の勤行の比に、又改めて伺ひませうか

上人 丁度今間暇でムる——モシ伯爵、少々御中座を願ひたうムるが

バリ イヤ、御勤行の御邪魔を致しては相済みませぬ——コレ、アユリエット殿、木曜には早朝御誘ひ申すてムらう、先づそれまではあさらば、此聖い接吻も御預け申さう

とバリ退場

アユリ あゝ扉をお閉め下さりませ、そして御閉めなされたなら、御一緒に泣いて下さりませ、最早望みの綱も絶え、療治の道も、救助の方も盡きた此身

上人 あゝアユリエット殿、卿が心勞は御察し申す、拙者は驚いて知慧も出ぬ、聞けば次の木曜には、此伯爵と結婚致さねばならぬ破目になり、延すに延されぬ仕儀とやら

アユリ 御聞きなされたとはかりでなく、どうぞして、遁れる工夫を何卒御

教へ下さりましたし、若し御助け下されう御考案もないならば、責めて妾の決心を御留め下さりますな、後とも云はず此小刀で、たつた今どうともなりませう、妾の心とロメオ様の御心とは、神様の御結び合せ、又二人が手と手とは、上人の御結び合せ、されば此手は、ロメオ様への起請文に捺した印、それを又異つた誓紙へつかぬ中、さては此真心が、他し男へ外れぬ中、此刀で一衝き死ぬがまし、どうぞそれ故、老巧な御胸より、早速の御考案をお示し下され、さらずば此身と此難場との争ひに、いづれが勝つか負るか、此小刀に行司をおさせ下さりましたし、御年の功でも御智慧でも、妾の面目といふものを、御立て下さる様にはならぬのを、これで成就致したい、ハテ其様に、何時迄考へて御在遊ばします、何ぞ仰有るなら、救助の道を仰有て下さりませ、ほんに妾は、寧ろ死

にたうムります

上人 コレサ、デユリエット殿、それで少々見込がついた、たゞそれには、今迄無謀の舉動を、せき留めやうと致したが、それにも劣らず、ちと無謀がましきことを致さねばならぬ、彼のバリス伯に嫁がむより、自害して死なむとの、強い意志あるが定ならば、此耻辱を避けむ爲めに、死ぬにも優る一事をば、決行するも厭はじな、不面目を免れむ爲めには、死と闘争もすなる卿、ハテ卿に其勇氣があるならば、救済の道をお授け申ひらう

アユリ お、彼のバリス伯と、祝言せいとの御詞より、彼方の塔の狭間から、飛降りよとの仰せがまし、さては山賊の群がる野道を行け、蛇の住家に潜めよとの御指揮もよし、吼猛る熊罩と、同じ鎖に繋がるとも、さて

は夜なく、骨堂の中に禁められ、からりと鳴る骸骨、濕つばい四肢の骨、黄ばむだ、髑の外れた髑髏などに、覆はれて過ごすとも、又は經帷子の新佛と、新しい墳墓の中に忍ぶとも、其様な聞いたばかりで身の毛のよだつ事共でも、たつた一人の方様に、節しい妻で通せるなら、恐いと思ふ事もなく、思ひ惑ふ事もなく、成し遂るは易い事

上人　ハテそんなら、これから家へ還つてくよくせず、パリス伯との祝言を承知なされい、明日は水曜ぢや程に、明日の晩は單獨で寢室にお寢みやれ、構へて乳母と一緒に寝やるな、さて此一瓶を持って往て、床の中へ入つたなら、中なる藥劑を飲み干しめされ、さすれば直ちに、卿があらゆる血脈に、寒い冷たい眠たげな感じがさし、脈はいつもの調子變りて、はたと留り、息も絶え、温味も失せ、生あるものとはよも見

えまい、臉上唇上の紅も、死灰の如くあせ果て、兩眼の窓の戸も、死來て生なる日の暮し如くに閉ぢぬべし、其外、体中の此處も、彼處も、生氣の可うせ滅び、硬う冷たう、死せるが如く見えやうぞ、さてかく、死といふ化の皮を被ること、凡そ四十二時にして、心地よき眠より、覺るが如く蘇生らむ、されば其翌る朝、婿の君が寢床より呼起さむとて來る時、卿は一時死してあらむ、我國の習慣にて、卿は最上の晴衣に包まれ、顔は掩はて柩車にかき載せられ、カブレット家一族の代々の死人を葬れる、彼の墓中に送られ、(一族の代々の死人を葬る墓といへるは、不思議なる穴倉になり、前に骨堂と云し、是に等し)さて其間にそれがしは、大なる穴倉になり、前に骨堂と云し、是に等し)さて其間にそれがしは、書面を以て、此謀計をロメオ殿に告げ知らせ、卿が蘇生らぬ前に呼寄せ置き、某と二人にて、密かに卿の蘇生を待ち受け、さて即夜卿をば、

ンチユアに伴ひ行かまめう、妄りに心變りを致し、又はめしき疑懼の念にさへられて、そを遂行の勇氣さへ失はぬなら、卿が現在の耻辱をば、これで見ん事救ひ得やう

アユリ おゝ疑懼の念などゝ勿躰ないどうぞ左様遊ばして下さりませ

上人 さらばこれから歸りやれ、心をたしかに、首尾克く此決心を成就せられよ、それがしは早速、ロメオ殿への書面を認め、番僧を一人急ぎマンチユアへ遣し申さう

アユリ おゝ愛よ、此身に力を得させよ、さらば力は救助を得させう——おさらば、懐かしの上人様

と二人退場

第二場 カブレット家の書院

カブレット、同夫人、乳母及び家僕共登場

カブ 此に書附てある程の客人を、皆な招待致して參れ——(と家僕甲退場)

——其方は氣の利いた料理人を、二三十雇て參れ

乙家僕 決して拙い料理人を雇込むやうなことは致しませぬ、一々口試を致させて試して見ませう程に

カブ それはどうして試しやるぞ

僕乙 ハテ、口試の出來ぬは、拙い料理人と極つて居ります、それ故口試の出來ぬ者は、一人なりとも、連て參ることではムりませぬ

カン そんなら早う參るがよい

と僕乙退場

此度は、何事も碌々間には合ふまい、何と嬢は、ラウレンス上人の許へ参つたとか

乳母 アイ、左様で、ムります

カフ 何ぞ身の爲めになる教訓でも、受て参るやも測られぬ、氣六つかしい、我儘な娘ではあるわい

アユリ エット登場

乳母 それ其處に御嬢様が、懺悔を濟して、嬉しさうな御顔付で御出なされました

カフ ヤイ、頑固娘、何處を彷徨いて参つたぞ

アユリ 父様の仰せに背いた不孝の罪を、悔改めよとの、教へを受けて参りました、そして上人様から、茲へかう身を投げ臥し、父様の御宥怒を乞

ふ様にと申されました、どうぞ御宥し下さりませ、是からは必ずとも、仰せを背きは致しませぬ

カフ ヤア、伯爵を呼て参れ、そして此始末をば、早速に報知致せ、ヤレ、明朝約束を極ると致さう

アユリ 彼君には上人の庵室で、圖らず御目に懸りました、そして出来るだけ似つかはしい、御挨拶を致しまして、ムります、もとより乙女の身に相應はしい、範圍の中ではムりますが

カフ ハテ、それ聞いて安心致した、それでこそ、サア、起きた、かうなくてはならぬ筈、——どりや伯爵に逢ひたいもの、早よ往て連て参れと申すに、——ほんに彼の上人は、尊い難有い高僧ぢや、此市中の人民は、誰とて恩恵を受けぬはない

デユリ コレ乳母其方は妾と一緒に居室へ往て明日の仕度したくに似つかはしい、入用の装飾品まけものを撰出してたもれいのう

夫人 そのやうな事は、木曜迄てよいではないか、まだ時は十分ぢやぞへ
カフ ハテ乳母、一緒に往つて遣れ——寧その事明日寺へ行くとせうか

(結婚を明日に候
上げむとの意)

とデユリ、乳母打連れ退場

夫人 そんなら準備の暇もムりませぬ、最早今日も夕暮時

カフ ハテ我が一人で働て、萬事手ぬかりは致させぬ、コレ其方はデユリ
エツトの許へ参り、身仕舞を手傳てやれ、拙者は今夜は寝ぬとしやう、
ハテ打棄て置け、此度といふたつた一度、女房役をして見たい——コ
リヤ——誰を居らぬか——皆んな何處へか往て仕舞た、よい——バ

リス殿迄歩いて参り、明日の準備をさせて呉れう、イヤ拙者は痛う氣

が輕うなつた、彼の旋毛曲りの娘めが、よう了解わかひて呉れたに依て

と一同退場

第三場 全 デユリエツトが居室

デユリエツト、乳母登場

デユリ 衣服装飾は是れてよい、それはさうと乳母、アノ今夜は何卒一人て
寝させてや、知つての通り、罪深いねぢけなりの妾が身の上、其の身の上
に幸福を降し給はるには、たんとく御祈禱いのりを捧たまずばなるまい程
に

カフレット夫人登場

夫人 何と忙がしいかや、手傳うてとらさうか

ゲユリアノ明日要る様な品物は、皆んな揃へましてムります、何卒最早御
拂ひ下さりますな、そして今夜は、乳母をば母様の御側へ御置き遊ば
しまし、こんな俄かな事なれば、母様にも屹度御忙がしい事でムりま
せう

夫人 そんなら、早う往て休むがよい、身軀を休めて置くが大切ぢやぞや

と夫人、乳母退場

ゲユリさらば是がお別れ——此上は何時復た逢はれることぢややら、想
へば身中に慄然と寒氣が沁渡り、凍死もしさうな心地、尊を呼還して、
此悲さを慰めうか、喃乳母——イヤ、乳母を呼んで何になる、此忌
な一幕は、たつた一人て演ずはなるまい——お、こゝに藥瓶が——

またが此一藥に若しや、效驗もなかつたなら、ハテ何とせうぞへナア
明日はあとなしく祝言せうか、お、いや、——それこそ是(復劍を)
が承知せぬ——汝は其處に臥つて居や——(と復劍を投川す)

若し又此藥といふも、上人様が前以て、妾をロメオ様と、祝言させて置
きながら、今亦重ねての祝言を、此身に強ふる不面目を遁れう爲め、此
身をなき者にせむとの毒藥では——お、どうやら其様な心地もす
る、とはいふもの、其様な事があられうが、此永の年月、尊い難有い上
人で通した御方、たゞ恐ろしいは墓の中で、まだロメオ様が御出のな
い中、若しひよつと蘇生つたら何とせう、ぞら恐ろしいは茲の事、清い
空氣は入口から入ることもない、穴の中で息が塞り、ロメオ様にも御
目に懸らず、又死んで仕舞はせぬか、若し又生存へ居るとても其時の

胸の中は、闇や地獄が一杯で、四邊は恐ろしい其有様昔ながらの古塚には、幾百年が其間物故たりし一族の、あらゆる骨は堆かく、まだ死んで程もない、血だらけのタイバルトは、經帷子で腐る最中、夜にもなれば時を切りて、亡靈も現れ出るとか、おゝゝ若しまだ夜明前に目が覺めたら、四邊は臭穢充ちゝて、彼の刑場の露と消えた罪人の骸から生ふるてふ、蒼人草を引抜けば、怪しの泣聲を振立て、聞く人の心も狂ふと聞く、その様な叫びの聲は耳を衝き、見る物聞く物の怖ろしさに、いつしか心狂ひはせずや、心狂ひて一族の骨に戯れなどはせぬがいな、さては斬りさいなまれたタイバルト殿を、經帷子から千切り取り、狂ひゝて、名ある一族の白骨を、棍棒のやうに振廻し、我から此頭を、打潰しなどはせぬかいな、おゝアレゝゝ、タイバルト殿の亡靈が、

彼が軀軀を串刺しに、突刺したロメオ様を、尋ね廻るが見えるやうな――
 およしなされタイバルト様――申しロメオ様、貴郎を祝うて此妾は、今此薬を飲みますぞや

と藥を仰ぎ舞臺の隅なる發臺の上に倒れる

第四場 全 カブレット家の書院

カブレット夫人及乳母登場

夫人 コレ、乳母、此錠を持って往て、藥味をもつと持て來やれ
 乳母 臺所ではやれ、菜やれ、椀、椀と呼立てます

カブレット登場

カブ コレ起きよゝゝ、二番鶏が鳴いたわ、鐘が鳴ったわ、最早三時ぢや、コ

レ、アンデレリカ(これは名ならむ)焼物に氣を付けい、少しの費ついでを惜おぼむなよ

乳母 あのみあ、とんだ御節介の旦那様、もう御寝み遊ばしまし、ちつとも御寝なさらいては、明日は御病人におなり遊ばしませう

カブ いや、ちつともそんな氣遣ひは、もつと詰らぬ事ことで、終夜よる寝なかつた事も度々あるが、それでも病人にはならなんだ

夫人 ほんに貴郎は御若い中より、婦人かんなの後を追ふが御好でムりましたな、乍去今となつて、そんな野こ心こころで夜明しなどは、最早おさせ申しませぬぞへ

と夫人乳母退場

カブ 焼くわく——

三四の僕共炎申、薪籃などを携へ登場

して者共、それは何ぢや

僕甲 料理番へ届ける品物でムりますが、何に用るやら存じませぬ

カブ 急いで持て往けく
と僕甲退場

ヤイ、もつと乾いた薪を持て来い、ピーターを呼んで、何處にあるか聞
くがよい

僕乙 いや薪の在家を捜し出す程の智慧ならば、此僕この僕にもムります、ピーターを引張出すがものはムりませぬ
と退場

カブ いしくも云うたな、うい奴やつく——是はしたり夜が明けた、伯爵は聞もなく、樂人を連れて(結婚日の朝、音楽を以て花嫁が眠るを覚すは當時の習慣と知るべし)参るであらう、そのやうにいうてぢやあつた

と奥にて音楽の音聞ゆる

や、参つた様子——コレ乳母——奥——ヤイ——乳母来いと申すに——

乳母又登場

早よヂユリエットを起して、身仕舞を致して遣れ拙者はパリス殿に挨拶致して来る——急げ——大急ぎぢや、舞殿は早やわせられたぞよ、急げと申すに

と二人退場

第五場 全 チユリエットが居室

乳母登場

乳母

お嬢様申しお嬢様ヂユリエット様、マ、よう眠てお在なさる、コレ嬢様申し夫人、何とマアいざたない、申しいとしの御方、お嬢様、戀人様、コレサ花嫁御、ハテマア一言の御返事も遊ばさぬ、お、それも道理、まだちつとばかりしかお眠みなさらぬ、せめてあと一週りもお眠みなされませ、ハテ其次の晩はパリス様が、貴嬢を少しもお眠せ申さぬお覺悟でムりませうに——ほんに——よう眠つてお在遊ばすこと、とは申せ是非共お起し申さいでは——嬢様、嬢様、嬢様、え、伯爵をお床の中へお連れ申しますぞへ、それでこそ、お起き遊ばさずには居られませんまい、どうでムります、これはしたり最早御服装をなさつて、御晴衣を召して、又御寝なされたか、イヤお起し申さいでなるものかいのう、お嬢様————ヤア——助け船——お嬢様はお死になされた

お、悲しやあちきなや、誰ぞ御酒を早う持て來や(興奮州として興へむとする也)御前様夫人様――

夫人登場

夫人 騒々しい何事ぢや

乳母 おゝこんな悲しい事は

夫人 何事ぢや

乳 アレ御覽遊ばしませ、口惜しい

夫人 コレ、娘蘇生りや、眼を開きやれ、汝が死ぬなら此母も一緒に死ぬぞや、助けて、早う助けを呼びやいのう

カブレット登場

カブ ヤイ、デユリエットを連出せヤイ、婿殿がわせられたは

乳 お嬢様はお死になされました、おなくなり遊ばしましたわいなア、
喃かなしや

夫人 悲しい事になりました、娘は死にました、ぞへナア

カブ 何ぢや、ドレ見せい、ヤア、冷たうなつた、血は凝結つて節々は硬
ばつた、此唇は息が絶えて久しうなる、時ならぬ早霜は、美しい野中の
花の、目星しいものに降る様に、既や死といふものが、娘の身に散りか
ゝつたか

乳 おゝ今日は何といふ、悲しい日てムりませう

夫人 おゝ悲しや淺ましや

カブ おもいれ拙者を嘆かせうとて、娘を奪つた死の神め、拙者が舌を縛
り付け、口さへ今は利かれはせぬ

ラウレンス上人、パリス、樂人を連れて登場

上人 花嫁御には、寺入の仕度はようムるかな

カフ いかにも仕度は調ひましたが、最早永の寺入りてムります、お、聾殿、祝言の途前夜、死の鬼めは、卿が妻を寝取りましたぞ、御覽あれ、花の様なる姿ながら、死の鬼故に萎み果てた彼の様子、死こそ今は拙者が聾、死こそ今は我嫡子、娘と婚儀を擧げたは彼奴、拙者は最早死にまする、死んで彼奴に跡を譲りまする、生命も財産もみんな彼奴の有に致して遣ります

パリ お、待ちに待た朝が来て、此様な光景を見せられうとは

夫人 今日如何なる悪日ぞ、休む間もなき白駒の歩み、めぐる年月の其中にも、こんな悲しい日がまたとあるかいな、たつた一人の可愛い娘

樂みも慰みもこれを措て外にはない、たつた一人の愛娘を、彼の残忍な死の鬼が、遠い見えない處へ捕て往たか

乳母 お、悲しや、悲しいくく日、こんなあちきない、淺ましい日には、今迄出遇たこともない、お、今日といふ此日の恨めしや、お、忌まはしの日、此様な悪日があるかいな、お、悲しや、悲しや、なア

パリ お、汝憎くき憎き、女たらしの死の鬼奴、よくも、我がデユリエットを奪ひ慰み辱しめ、擧句の果に殺せしよなア、残忍無情の汝故に、此始末、お、戀人、お、我が生命、今ははや生命にあらず、とはいへ、死んでも矢張り戀しいよナア

カフ あ、運命の神に侮られ、苦められ、憎まれ、殺された不幸な娘を、悲しい此日、何故めてたい今日の祝言を壊しに來た、お、娘、娘、今は我が

娘でない、娘は死んだ、あゝ娘は死んだ、その娘と共に、我がたのしみも葬られう

上人 静まりめされ、恥辱でゐる、愁傷は愁傷では治り申さぬ、此美しい乙女は貴殿一人の有てはない、天も持主の一人でゐたが、今は天の獨占、乙女の爲めには結句仕合せ、死ねば貴殿が持主たる資格は消失すれど、天の資格は永久永劫、貴殿がこれまで願ひしは、娘御が出世ならずや、娘御が昇進こそ貴殿が願望の頂上でゐたらう、然るに何ぞや、今娘御には人間界を脱して、雲の上まで昇進し、天上なせしを悲み給ふか、子を愛し給ふ情はさることながら、娘御の幸福を見て、物狂はしきまで嘆かせらるゝは、眞に子を愛する道ではゐるまい、婚を結んで長生致すは幸福なものではゐらぬ、祝言草々、天折致す者こそ、眞の幸

福者でゐる、此上は涙をふいて、此美しい屍の上に、常盤木を掩ひかけ、國風に従ひ晴衣を着せて、はや／＼寺へ御送りなされい、人情の恐しさは、吾人をして嘆かしむれど、其人情の涙こそ、理性の笑ふ所なれ

カア 目出度の祝言にと調へし物が、悲しい葬式の役に立つ、管絃の音は悲しい鐘の音、祝儀の馳走は法事の振舞、祝ひの歌はうら淋しい輓歌となり、花嫁を飾らむ爲めに摘みし花を、今は屍の上に蒔く、何事もたゞ反對に、拗れ／＼しあぢきなさ

上人 カブレット殿先づ／＼彼方へ——夫人にも御一緒に——パリス殿にも御出なされ——誰方にも、此美しい亡者を、早う野邊送りの御準備をなさりませい、何にてもあれ、禍の起ると申すは、天の御咎めの降りし故、されば天意に逆らふことなく、後の御咎めを招がぬ様の御

心懸が肝腎てゐる

とカプレット、同夫人、パリス及び上人退場、それより僕のヒーター出来り、樂人と様々の駄洒落を吐きのめして一同退場

幕

第五幕

第一場 マン・チュア 街上

ロメオ登場

ロメ 昨夜の夢が正夢なら程なく何ぞ嬉しい談が聞かると、等胸の中に鎮座まします、心もそはくと常ならぬ元氣に、身も空に躍るばかりの楽しい思ひ、此身は死んで程もなく、いとしの妻が尋ね來た昨夜の夢——死人も心は確かとは不思議な夢——此唇に接吻して、生命を吹込み呉れしと思へば、忽ち我は蘇生り、まさしく帝王の歡樂を極めたたのしさ、あゝ想へば戀てふものは、夢に見てさへ、彼のやうに楽しいもの、眞實ならば、ましていかばかり嬉しからう

バルセイサア長靴穿にて登場

ヤ、エロナよりの音信ぢや、コレ／＼バルセイサア、上人より拙者への書面を持参致したか、デユリエットは如何致した、父上は御健勝か、ハテ繰返して尋ぬるが、デユリエットは如何致した、彼女さへ安らかに日を送り居るなら、外の事はどうてもよいといふものぢや

バル そんならデユリエット様は、至つて安らかな御身の上になられました故、萬事申分がないと申すものでムリますな、ハテ、デユリエット様の御躰軀は、カブレット家累代の御墓の中に、安らかに眠つてムリます、そして魂魄は、天使の群に御交りなされました、某は御墓の中に御入り遊ばしたを拜見致し、草々貴君に御報らせ申さうと、飛んで参つたのでござります、イヤ、兼ての御依頼故参りましたが、簡様な面目

もなき御使、何卒御赦し下さりませ

ロメ 確と左様か、え、運星も恨めしい——其方は拙者が宿を存じ居らう、筆と墨を取て来て、驛馬を仕立て、呉れよ、拙者は今夜出立致す

バル 何卒御氣をお鎮め下され、どうやら御血色も悪く、たゞならぬ御様子、何ぞ思ひ切つた事でもなさるのでは——

ロメ それは飛んだ感違ひぢや、先づ／＼往つて、頼んだ事を致して呉りや、上人からの音信は持つて来ぬな

バル 御音信はムリませぬ

ロメ よしく、早う往て馬を雇うて呉りや、今の中に又會はら

とバルセイサア退場

あ、デユリエット、今夜の中に、追付け此身も卿の側へ行くぞや、さて

その方法は何うしたもの——ちゝ絶望の淵に陥れば飛んだ考の浮ぶものぢやな、それよ此邊りに、さる藥劑師の店があつた筈、遂此程の事であつたが、檻縲にくるまり、むくつけき額つきを致しながら、藥草を撰り分けて居るを瞥と見しに、疥せこけた顔つき、貧苦に骨を削らるゝ、蹙れ姿、見すばらしい店前には、龜の甲やら刺製の鱈魚異形の魚の皮などが釣下げられ、棚の上には空箱、緑色の土瓶、氣胞、囊、微びた種子、荷細の屑、薔薇花の乾びたものなど、貧乏臭い品物がまばらに散らばつて、店飾りをなし居る躰たらく、其時其貧しい様子を見て、此マンチユアでは賣つたが最後、早速死罪と定まれる、毒藥などの要る時に、誘惑して買はう男は、此奴を措て外にはないと、獨言のやうにつぶやいたが、想へば今日あることを腹の蟲が知らせたか、イヤ是非共今日

は買はにやア措かぬ、何かといふ内に、ちゝ此家ぢや、屹度此家に相違はあるまい、店も鎖してあるは休日故か、コレ——藥劑師殿頼む——

藥劑師登場

藥劑 騒々しい何方ぢや

ロメ コレ鳥渡茲へ——さて卒爾ながら、卿はこれが欲しさうな、取て置け四十兩あるわ、して某の用事はな、毒藥を少々貰ひたい、喉元を過るや否、尿管中に擴がつて、浮世に倦み果てた者などは、勝手に容易う死し得る様な、そして大砲の胴躰から烟筒が發火するやうに、鋭く敏く人間の躰肉から、呼吸といふものを出して仕舞ふ様な、調劑が欲しいものぢや

藥

左様な毒劑ならば、幸と持合せますが、マンチユアの國法では、毒劑

を賣る者は、早速死刑に處せられますれば

ロメ ハテ卿は其様に貧しく、みぢめな生計を致しながら、死するがそれ程恐ろしいか、卿が煩の上には、餓鬼の相があり、ひもじさうな眼の中には、やる瀬なき貧苦の姿が見え、背上には世の輕侮蔑視を背負て居らるゝ、定めて浮世は卿に懐かしい友でもゐるまい、浮世の法とても同じ事、浮世は卿富貴なれとの法を作りもしまい、ハテそんなら辛抱して、貧な生計をするにも及ばぬ、法を破てこれを取て置きやれ

藥 左様ならば仰に従ひませうが、これは僕の意志が従ふのではなくて、貧乏が従ふのでムります

ロメ 某も卿の貧乏に拂ふので、卿の意志に拂ひは致さぬ

藥 此藥を御好みの飲料の中に入れてお飲みなされ、然らば縦ひ二十

人力の御方なりとも、即座に倒れるは請合てムります

ロメ サア取て置け代物の黄金、これこそ却て人の心に大毒の物、卿が賣られぬと申す、此様な毒藥などより、此厭な世の中て人を殺すは此方が遙か多いわ、されば毒を賣たは此某、卿は左様なものを賣りは致さぬ、おさらば、甘い物を食てお肥りやれ——(毒藥に向)此上は毒ではなうて藥殿、此身と共にデユリエットの墓へ參て、此身の役に立てたもれや

と退場

第二場 エロナ、ラウレンス上人の庵室

番僧ツヨシ登場

アロン 上人様上人様御在なされましたか

ウウレンヌ 上人登場

上人 あれこそ番僧デヨンの聲音に相違ない——ホーようこそマンチ
ユアより戻られたな、ロメオは何と申された、若し又心の丈を筆に托
したとあらば、其書面を見せられい

アロン されば仰を受けました時、同道して参らむ爲め、同じ宗門の友なる
一人の僧を尋ね、て、此市のさる病家に立寄りました處、尋ぬる友
には逢ひましたが、市の檢疫官に見咎められ、兩人共惡疫流行の家に
入りたる疑ありとて、一室の中に押籠められ、一切外出を禁められ、そ
れ故マンチユアへ急行の役目も、そのまゝ中止と致しましてムリま
す

上人 然らば彼の書面は何人が、ロメオ殿へ届けましたな

アロン とうとうお届けが出来ませず、又此通り持還りましてムリます—

—上人の御許へ、御還し申す爲めの使さへ、雇ふ事が出来ませなんだ、
そのやうに傳染を恐れて、嚴重な押籠でムりました

上人 さて、それは間の悪い事で、ムった彼の書面は些々たる平常の
音信とは違ひ、極々肝要の用事のみで、ムったに、それが手遅れとなつ
たと在ては何のやうな事にならうも知れぬ、コレ、デヨン殿、急ぎ参て、
鐵挺を一挺何處ぞで才覺致し、庵室へ届けて下され

アロン 畏りました、早速求めてお届申しませう

とアロン退場

上人 此上は拙僧單獨で、墓場へ行て見ずばなるまい、今より三時が中に

彼のデユリエットは覺さむるであらうに其時此かる事共を、ロメオに
えう知らさぬと聞いたなら、嘸ま拙僧を怨うらむてあらうが、致方さもない、又
ぞろマンチユアへ書面を遺し、ロメオの來る迄ま彼女を庵室へかくま
ひ置かう、ても哀れな事ぢや、生ける躰しん軀を死人の墓に埋め置くとは

と退場

第三場 全 墓所、カブレット家代々の墓

マリヌ、花、蠟燭を持てる小姓を従へ登場

マリ コレ小姓、其蠟燭を此方へ、そして彼方へ退のて居や、イヤ矢ッ張りそ
れは消して置け、人に見付られたうない、彼方かの水松の下に身を投臥
し、しかと耳を地面へ付つて居い、すりや地面は、絶えず穴を堀らるゝの

で、弛ゆるくざく／＼として居る故、近寄る人の足音は、必ず汝が耳に聞え
やう、若し其様な足音が聞えたなら、何者か近き來るとの合圖に、口笛
を吹くのぢやぞや、その花も此方へおこせ、今云付けた通りに致すの
ぢやぞ、いざ／＼

小姓 (旁白) こんな淋しい墓場の中に、獨り離れて臥ふて居よとは、己おのや怖おそう
てならぬけれど、え、往ゆて見やうどうともなれ (と片隅の方へ退く)

マリ 優やさしい花の乙女子殿、卿が新枕の床の上にかう花を蒔かうぞや—
—お、悲しや、土と石とが卿の天井——さて此蒔た花の上には、これ
より夜なく、香水を振懸て進ぜうぞ、若し香水がないならば、悲嘆の
涙を灑まいで進ぜう、それがしが追悼の志には、毎夜さ卿の墓に花を蒔
き、泣の涙を灑ぐと極めやう—

此時小姓口笛を吹く

何者か近寄來るとの小姓が警告、此深夜に箇様な所へ彷徨ひ來て、我が眞の戀の手向の追善を妨害せむとは悪つくい奴、何ぢや、燈火を持て參つたな——さらば夜よ、闇よ、暫し此身を隠まひ呉れよ

と片隅へ退く

ロメオ、バルセイッア、蠟燭、鐘、笛などを携へ登場

ロメ 其鶴嘴と鐵挺は此方へおこせ、又此書面はな、明早朝に父上の御許へ届けて呉りやれ、其燈火も此方へ、そして今から其方は、何を見聞致さうと、必ずともに此處を去り、それがしが仕事の邪魔を致すてないぞ、ハテ某は、此塚の中へ降て、一つには女房の顔も見たし、又それより大切な、彼が指より貴重な指環を抜取り、大切な使途に役立てねば

ならぬ、それ故汝は、早速これより歸るがよい、若し飛んだ嫌疑を起して、某が何を致すか、覗いて見やうなど、戻らうなら、汝が四肢を八裂にして、墓場の餓鬼に蒔て呉れう、時は丑満、我が意志は暴び狂ひて、餓えたる虎よりも猛く、酷く、吼ゆる海よりも容赦はないぞ

マル 畏りました、これから歸て、決して御邪魔は致しませぬ

ロメ 左様致して汝が志を見せて呉りや、少しばかりぢやが取て置け(金貨を興)——此上とも繁昌に暮すがよいぞ、おさらば、うい奴

マル (旁白)とはいふもの、此邊に潜むて居やう、何とやら氣遣はしい御様子、御心の底がどうも怪しい

と片隅へ退く

ロメ 汝脈はしの胃臆(墓を呼懸)土の子を腹一杯に取て食ふ、死の腸いてか

うして、朽ちた頭あたまを開いて呉れう(と墓の入口を掘開く)さて此身といふ食物を、又ぞろ汝が口に詰め込むぞよ

スバリ ヤア此奴は彼の御追放の、猪口才なモンテীগのわッばめぢやな、此奴がいとしの妻の従兄を殺し、その悲み故に、彼の美し者も死んだのぢやに、今又此墓なる屍骸共を、辱かしめむとて忍び來りし卑怯者、どりや捕へて呉れう

(と進み出て)

コレ、モンテীগの卑怯者、その様な汚らはしい仕事は措いて呉れ、殺した丈では飽足らず、其上にも尙ほ侮辱を加へむとか、極道者め捕つたぞ、従順しく従て來い、此まゝ活かしては置かれぬ奴

ロメ 實に生きては居られぬ此身、今夜茲に來たもたゞそれ故若殿、コレサ絶望の淵に沈める人に、滅多に御手出はなさらぬがよい、早々茲を

御退きなされい、この死骸を御覽あれ、貴殿とても、こんな様にはなりたうもムるまいが、某に狂暴な舉動を致させて、餘計な罪を此身の頭に重ねさせて下さるな、お退きなされい、某は自分に刃向はむとて來りし身故、自分の身は何とも思はねど、貴殿の御身が氣遣はしい、御出なされ、長居は御無用、生存て狂人の慈悲故、危い瀬戸際を遁れおうせたと後々の話艸になさるがよい

バリ 其の頼みが聽かるゝもので、イヤ拙者は、亂賊として汝を捕縛致す

ロメ ナニ某を怒らせうとか、然らば相手を致せ、小童奴ツ

と兩人斬合ふ

小姓 ヤレ斬合が始まつた、夜番の者を呼んで來やう

と退場

パリ おゝやられた——（と倒れる）此上は慈悲ぢや程に、墓を開て、デユリ
エツトの傍へ葬めて呉りやれ

（と息絶ゆる）

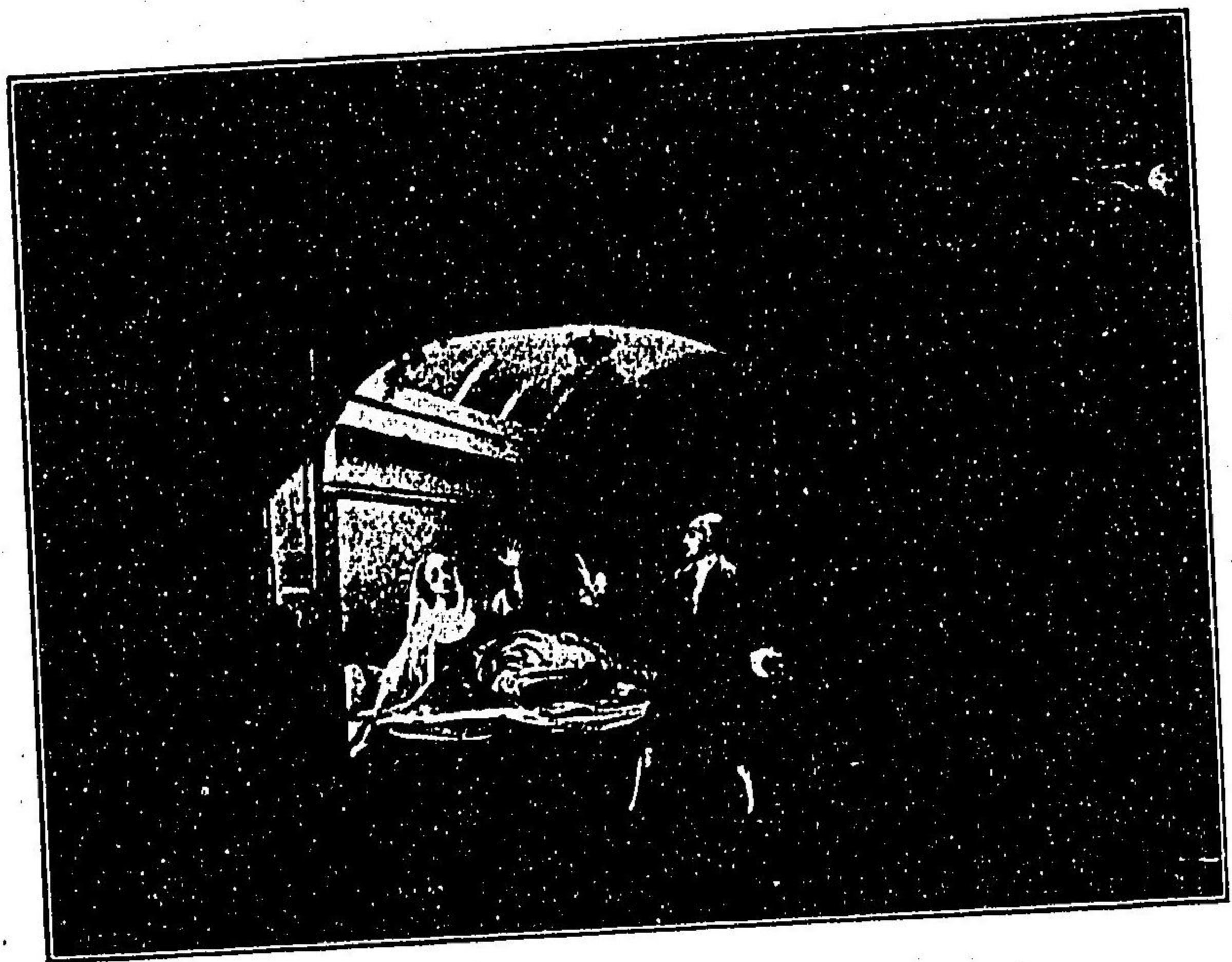
ロメ 其望みは聴いて進ぜる——ドリヤ此奴の顔をよく見て呉れう、ヤ
ツ、メルクチオが同族、パリス伯であつたよなア、先刻マンチュアより
の道すがら、バルセイサアが馬上にて、何事をか云ひたるを、心も亂れ
て我はたゞ、浮の空にて聞き居しが、想へばパリス殿は、デユリエツト
と祝言の手筈にてありしとやら、申せし様にも記憶え居る、さすが夢
てはなからうな、さては今デユリエツトと彼が云しを聞きしより、心
狂ひて箇様な考が浮びしか——おゝ何はしかれ握手を致さう、それ
がしと共に、不幸者の戸籍に上りし人、此上は貴殿を、此立派な墓に葬
て進ぜやう、ナニ墓、おゝ否、墓ではない堂でゐる、此中にはデユリエツ

トが臥て居る故、其美しさで此窟も、光り輝く殿堂となつた今、おゝ此
某と申す死骸の側に、貴殿もお臥しなされい——

とパリスを墓の中に横へる

人の將さに死なむとするや、往生前の上機嫌とて心たのしき事あり
とか、然るに、おゝ此の我が有様は何事ぞ、これが上機嫌と云へやうか
——おゝそれなるは我戀人、我妻か、卿が蜜の様な呼吸を奪ひ取りし
死の鬼も、まだ卿が美しさは損はぬな、卿が唇の上、瞼の上に、美の旗は
まだ紅に翻り、死の青旗は掲げられねば、まだ敗亡は致さぬな——そ
れなはタイバルトか、血染の帷子にくるまつて臥て居る、おゝ貴殿へ
の寸志には、まだうら若い御身をば、二つに斬つた其腕で、貴殿が怨敵
（自分）を討果すに、上越すことは、ゐるまい、宥し給へ、從兄殿——ア、い

としのヂュリエット、いかなればそのやうに、いつまでも美しいぞ、さては彼の瘠せさらばえた厭らしの怪物、死の鬼が戀着し、やがては己が愛妾となさむの下心にて、此暗い處へ囚へ置くか、よしさらばそれがしは、卿の傍に永く停り、此永夜の殿堂を、又と立去ることではない、今は卿が侍女共なる、蛆虫の群に交りて、永く茲に残るでムらう、お、茲てこそ永久の安息を得て、浮世に倦果てた此現身から、不運なる宿命の首枷を、振離さうと決した某——眼よ、既やこれが見納めぞ、腕よ、名残惜みに抱け、緊めよ、唇よ、息の出入の扉なる汝はな、眞實籠めたる接吻をもて、現身を死の鬼へ賣渡す、無期限の契約に關印せよ、さて此上は、死出の旅路の嚮導(毒藥を指して云)いざ——來れ、無分別の水先案内、憂世の大海に倦んじ、疲れた棚無小舟を、はや——岩角の上に乗上げ、微塵と



十八世紀の名優ガリーリックが同じく當代の名優ベラミー夫人と、ロメオ、ジュリエットを演ずるの古畫圖は墳墓内邂逅の場、ジュリエット蘇生の段なり、此篇にては此時既にロメオは死したる後に居合せたるは、ラウレンス上人なれど、ガリーリックは、ロメオ毒を服したれども未だ全く死せざる中に、ジュリエットが蘇生したるやうに演じ、當時の見物を感動せしめたりと云ふ(巻頭の『ロメオ、ジュリエットに就て』を参照すべし)本圖は舞臺にて墳墓内を演ずる時の道具立を示す爲めに挿入せり

なせよ、いざいとしき妻へ(と毒を仰ぐ)——あゝ藥劑師の言葉詐ならず、
効驗は親面——かう接吻を致して、さてこれで大往生——

と息絶ゆる

墓所の彼方に、ラウレンス上人、提灯、鐵挺、鋤を携へ登場

上人 聖フランシスも御助けあれ、今夜はわが老ぼれ脚の、幾度墓に躓き
しことよ——其處に居るは何者ぢや

イサルセ 上人にも豫て御存じの者、怪しい者ではムりませぬ

上人 あゝ其方が、あの彼方に、眼もない觸體か蛆虫の外照すものもなか
らうに、燈火の燃え居るはアリヤ何ぢや、拙者の見る所では、丁度カブ
レット家の墳墓の邊りと思はるゝが

イサルセ 仰の通りでムります、そして其處に居りますは、豫て御厚情に預

りまする僕が主人てムります

上人 してそれは誰ぢや

バル ロメオ様で

上人 何時頃此處へは参られたか

バル たつぷり半時程前に参りましてムります

上人 彼の墓迄一緒に参らう

バル 僕はえう参りませぬ、主人は僕を、歸宅致したとのみ思うて居ります、若し僕が居残て、何をするか覗いて見やうなどと致したなら、殺して仕舞ふと、恐ろしい御様子でお嚇しなされました

上人 そんなら茲に残て居い、拙者は獨りて参らう——どうやら氣遣になつて來た、お、何かひよんな事でも、起つたやうに思はれてならぬ

バル 僕此水松の下に、居眠りを致して居りました時、主人が何者とか斬合を致し、とうとう主人は、彼者を殺したといふ夢を見ましてムります

上人 ロメオ殿へと進み出て、ヤ、ヤ、此墓の入口の巖を染めたは何の血潮、血みどろになつた主なき劍が此安息の場處に棄て、あるは、こはそも何のしるしてあらう

(と墓の中に入る)

ロメオ殿、お、青ざめ果てた其姿——傍なは誰ぢや、ハテ、パリスもか、まかも血塗れの姿にて——お、今日は何たる悪日なれば、此様な悲惨な事が——や、ヂュリエットは動いて居らる、

とヂュリエット蘇生る

ヂュリエット お、お情深い上人様、我夫は何處にてムります、此身の行くべき筈

の處は、ちやんと記憶メモえて居りますぞへ、そして今は其處に參つて居りますな、アノ、ロメオ様は

(此時舞臺の奥にて騒がしき音)

上人 何か人聲が致すやうぢや——モシ令嬢お嬢の死、病毒、怪眠の巢窟くわくから御逃げなされい、人間業には如何とも爲し難き天力にて、我等が目算は阻くわましたさ、御出なされ、それぞれの卿が懐に抱かれて横はれるロメオ殿は死してゐる、パリス殿迄同様に、いで此上は卿をば、尊き比丘尼と姿を替へ、安らかに一生を送るやうに、拙僧が計らひ申すてゝらう、夜番の者が參れる様子、何かの問答は後の事、いさゝく御出あれ、拙僧は最早此處にはえう居りませぬ (と退場)

アユリ 御一人ひとりで御出なされ、此妾は參りませぬ——ハテ此物これは、あゝ眞實まことある戀人の手に握らるゝは鍾かねぢや、さては毒藥をお飲みなされ、非命

の最期をなされたか——あゝさりとは薄情な、悉皆みな御一人で飲むて了つて、此身の爲めには一滴も、残して置ては下さらぬ——せめて御口を接吻くちして見やう、まだ毒氣が御唇の上に残て居て、妾もどうやら死ねさうなもの(と)ロメオを接吻して、まだ御唇は暖かい

乙夜番 (奥にて)コレ小僧案内せい、何方どっちの方ぢや

アユリ ちゝ人聲が、そんなら手早く——あゝ、仕合せな此短刀(と)ロメオの佩けりて、(取)汝(短)の鞘は此處ぢや(と)自分の胸(を)刺し通し、汝は此處で錆び朽ちや、そして妾を死なせて給へ

(と)ロメオの骸の上に倒れかゝりて死す

夜番 大勢パリスの小姓を伴ひ登場

小姓 此處でゐります、それぞれの燈火のある處で

甲 夜番

地面は一面に血だらけぢや、墓所中を探して見いさゞく誰か参れ、探し當てたら何者でも、容赦なく逮捕せい

と夜番若干出て行く

浅ましい此光景此處には伯爵が斬殺されて倒れてゐる、ヤ二日前に葬られたデユリエット殿は、今死んだ許りの様に、身うちも温かく、血潮が流れてゐる——誰ぞ此由を殿下に言上致して参れ、カブレット家へも通知せい、モンテীগ家をも敲き起せ、又誰ぞ、其外それ／＼の人を探して参れ

と又夜番若干退場

さて／＼此浅ましい光景丈は、我等の眼にも見ゆれども、此浅ましい光景の眞實の所由縁因は、何んな所にあることやら、巨細を知らねば少しも判らぬ

若干の夜番マルセイシアを伴ひ再登場

乙 夜番

ロメオ殿の家來を一人、召捕て参りました、此墓所内にて尋ね出しましてゐります

番甲

殿下の御出迄確と逃さぬやうに致して置け

ラウレンス上人、他の若干の夜番と共に登場

番丙

僧侶を一人召捕て参りました、此通り顔へて、泣いて、溜息をついて居ります、此墓所の方から出て参る所を、我等が捕へて、此鶴嘴と鋤とを奪ひました

番甲

一大嫌疑の係れる囚人、其僧侶も逃がさぬやうに

エロナ公侍者大勢を従へ登場

公

かばかり早く朝寝の床より、我等を呼立るとは、何大事が起りしぞ

カフ レット、同夫人並に其他大勢登場

カフ 此様に騒々しう戶外で呼立るは何事ぢや

夫人 街を通る人々が、或者はロメオとたけり、或者はヂュリエット、又或者はパリスと叫びます、そして何れも、叫びながら、墓所の方へと走ります

公 何事やらむ耳も聾うる計りの騒々しさ、さても、氣遣はしい

番甲 殿下、申上ます、此中に伯爵パリス殿は斬殺され、ロメオ殿も死んで居ります、そして以前死したるヂュリエット殿は、又殺されたか、まだ温氣が失せませぬ

公 よく、四邊を搜索なし、此慘劇の本末を詮議致せ

番甲 既に捕へ置ました此者共、一人は僧侶、一人はロメオが家來、又此等

死人の墓を發くに屈竟な、コレ此道具を押收致しました

カフ ヤア、女房共、アレ見よ娘は出血致して居る、そして此短刀が、在家を取違ひて居るこそ不思議、ハテ、見よ、鞘はロメオの腰に空しく残て、中味は娘の胸に宿つて居るに

夫人 あゝ、悲しや、淺ましき此光景、老の此身を墳墓へと召寄する、鐘の音を聞くやうな

モンテーク及び大勢登場

公 ヤア、早朝より倒れて居るわ

モン さても、殿下、御聞下され、荆妻奴は、悴御追放の悲みが、高じて、とうとう、昨夜亡くなりました、此上に又老の身を苦めうとは、そり

や何事でムります

公 アレ見られよ、合點が參らう

モン お、汝不孝者、此父を振棄て、墓場に急ぐとは、こりや何たる仕打
ぢやぞへ

公 暫らく憤怒の口をお嚙みやれ、此疑獄の霧を拂ひ、其源を尋ねた上
は、我自ら率先して、卿が嘆を嘆きも致さう、さて時宜に依ては罪ある
者を殺しも致さう、たゞ差當りては耐や、如何なる大事もたゞ勘
忍の繩で縛て置け——者共嫌疑の囚人を引出せ

上人 かゝる事には不似合の此身なれども、時も時場合も場合、恐ろしの
此修羅場の發頭人との御嫌疑は、拙僧が第一番てムりませう、即ち拙
僧は御前に於て我と我身を責めながら辯解し、辯解しながら責めま

する覺悟でムります

公 然らば此儀に就き、卿が預り知る所を悉く御語りやれ

上人 精しく申せば長い事、拙僧が息の根のある中には、申悉すべうもム
らねば、たゞ概畧を申しませうに、それに死せるロメオ殿は、あれなるロメ
ヂュリエット殿の夫、あれに死せるヂュリエット殿は、それなるロメ
オ殿の操正しき妻でムりました、何を隠さう二人を結婚致させたは
此拙僧、さて其内密の結婚日こそ、タイバルト殿が最後の日、其非業の
最期故、只一日の新郎は、此市を放逐せられました、ヂュリエット嬢が
悲嘆にくれたは、それ故で、タイバルト殿故ではムりませぬ、然るをカ
プレット老人には、其悲嘆の責苦を和らげうとて、無理／＼パリス伯
へ嫁がせうとなされたげな、嬢には、其時、庵室へ尋ね參られ、此二度の

結婚を道がるゝ様に、どうぞ仕様を教へてと、たゞならぬ面持で、それがならずば其場で自害と覺悟の跡、乃ち拙僧は方を授け、睡眠劑を與へしに拙僧が考案通りの効驗あり、恰ら死せるが如くになられました。さて一方には、ロメオ殿へ書面を遣し、今夜此處へ馳せ参り、娘をば假の幕より救ひ出せ、藥力盡きて眼を覺すは、丁度今夜ぞと申し送りましたに、生憎や其書面を携へし使の者、番僧デヨンが、思はざる災厄にて拘留せられ、遂昨夜書面を持歸りました、止むを得ず拙僧は只一人、娘が蘇生の刻限に、一族の墳墓より彼女を救出さむとて、此の處に参りしも、一先づ庵室に留め置き、便宜の折を見て、ロメオが許へ送り届けむの下心でムります。然るに拙僧此處へ來て見れば、蘇生の刻限に暫し先だち、パリス殿とロメオ殿とが、非命の最期を遂げ居る始末、

聽て娘は覺めました故、何事も天意のなせる業と諦めて、一先づ墳墓を出る様にと諭し居る中、人聲が聞えし故、拙僧は急ぎ外面に立退ました。が、娘には絶望の餘り、共に立退くことを厭ひ、遂に無謀の舉動に及びしこと、察します。拙僧の存ずる所は先づこれだけ、序ながら結婚の儀に就ては、娘が乳母も預り知り居る筈、さてそれにつき拙僧が心得違故、かゝる大事にも及びしとの御考も候はゞ、ハテ、どうて先の短い命、此老躰を嚴かなる國法の犠牲となされるが宜しうムらう。

公 貴僧は從來、尊き聖と仰がれた高僧——さてロメオが家來は何處にぢや、其方には申條があるか。

バル 僕奴は、チユリエツト殿が亡くなられたことを、主人の許迄通知の爲め参りましたに、かくと聞いて主人には、取急ぎマンチユアより、此

處なる此墳墓へ參られたのでムリます、又これなる書面を、今日早朝
父君の御許へ届けよと仰せられ、御自身は此墳墓の中へ御入りな
され、某には即刻此處を立去れよ、去らずば斬殺さむと嚇しなされま
した

公 其書面は此方へ、どれ一見致さう——夜番を起しに參つたと申す、
伯爵が小姓は何處にぢや——あゝ、其方の主人は此處に參て何を致
した

小姓 夫人の墳墓へ、手向の花を蒔かうとて、御出なされたのでムリます、
僕には退て居よとの申付故、僕は退て居りましたに、間もなく、燈火を
携へた御方が來て、墳墓を掘り起し始めましたが、嚇て主人は其御方
に斬て懸るを認めました、僕は其時に、夜番を迎へに馳せ去りました

のてムリます

公 此書面にて上人が申條に、偽りなきことは明白ぢや、彼等二人が戀
の成行、まつたヂュリエットが死去の報知なども認めてある、又貧苦
に迫れる藥劑師より、毒劑を買受け、そを携へて此墓へ參り、ヂュリエ
ットが傍にて、死する趣も陳てある——それにつけても彼の二人の
仲悪者は何處にぢや——カブレット——コレ、モンテীগ、卿等兩家
の確執に、今こそ天罰は降りしぞ、卿等が唯一の慰藉なる秘藏子を、物
もこそあれ愛情といふ刃物にて、殺害するとは奇なり妙なり、又此我
は、是迄卿等の確執を見過したりし罪に依り、二人の近親を失ひたれ
ば、これにて一同、天の所罰を受けたと申すもの

カブ あゝモンテীগの老兄、御手を握らせ下されい、これが娘へ何寄の

引出物てムる、これより上に頂かれう物もムらぬ

モン イヤ乍去某は、此上に御贈り申す物がムる、と申すは、ヂユリエットが彫像を、純金にて建てたい考、此市がゴロナと申す名にて續かむ限り、此貞節高きヂユリエットが彫像に及ばむ程の高價の像、他に又とあらせたるもムらぬ

カフ ロメオが紀念も、劣らずはてやかに、推並べて建てませう、想へば我等が確執の犠牲となりし可憐の者

公 此朝げ悲しき平和は來りたり、日輪も悲嘆故、今日は面をよも見せじ、さく諸共に立還り、此悲しい事共を更に詮義致すべし、さて恕すべきは恕し罰すべきは罰するてムらう、ハテ、ロメオ、ヂユリエットが始終の物語より、もつと悲しい物語が他にあらうか

と一同退場

幕

ロメオ、エンド、ヂユリエットの悲劇終

明治三十八年十二月十三日印刷
明治三十八年十二月十六日發行

ロイヤル・エント・ヂェリエツト
定價金八拾錢

著者

戶澤正保
淺野和三郎

發行兼
印刷者

東京市京橋區銀座座丁目二十二番地
大日本圖書株式會社
代表者
庶務取締役 宮川保全

沙翁全集

發賣元

東京市京橋區銀座座丁目二十二番地
大日本圖書株式會社
大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷
大日本圖書株式會社支社

大日本圖書株式會社出版圖書特約販賣所

北海道 小樽。登間。白鳥。川南。池田。魁文會。二堂。山本。最上谷。村上。東京府 文林堂。水野。東京堂。六合館。丸善。
 仙鶴堂。中野。青野。中西屋。杉村。穴山。中央堂。松邑。森江。大倉。金刺。北陸館。三友。播磨屋。内田。東海堂。文會堂。滋
 山房。榮進館。長明堂。青年堂。柏屋。弘集堂。田沼。丸屋。高桑。高橋。覺服。野島書店。四村。中山。萬松
 堂支店。北光社。松田。目黒。山本。柿村。水野。いりは堂。盛化堂。尚古堂。煥平堂。文江堂。淨觀堂。木田。
 多田屋。伊沼。明文堂。川又。大塚屋。寺田。南龍堂。高木。宮田。内山。永樂屋。平石。青木。
 安屋。永東書店。川湖。吉見。谷崎屋。古澤。菅沼。大石。柳正堂。郁文堂。
 日新堂。水學堂。小林。朝陽館。四澤。盛文堂。丸山。藤崎。虎屋。陽文堂。丁子屋。上野屋。
 文港堂。佐藤。近藤。築田。浦山。今泉本店。今泉支店。伊吉。盛文堂。日向。牧野。五十嵐。相原。大阪府 中村。
 東海林。藤崎。鮮進堂。中田。勇海堂。柳田。若林。中井。河合。松田。村上。南波。岡島。金川。中川。柳原。小谷。松村。三木。梅原。吉岡。前川。丸善。田中。三宅。石田。北村。金尾。石井。本田。中井。竹内。
 熊谷。石田。福浦。竹内。木村。藥師寺。虎興號。集英堂。木原。木原支店。高橋。品川。西村。宇都宮。近田。古香堂。德岡。今井。藤谷。安達。大藤。圓山。川岡。板倉。
 武内。鈴木。兒玉。原田。藤川。村田。白銀。小原。宮井。黒崎。宮脇。宮。井。入江。龜友。向井。土肥。澤本。石田。桑岡。菊竹。梅津。中園。佐野。甲斐。野依。
 牧川。河内。長崎。松井。津野。野崎。谷。吉田。久水。豐見城。有馬。

78
69

